

逢坂元吉郎の身体論

寺尾 寿 芳

逢坂元吉郎の後期における身体論は徹底的に秘義性に彩られたものであり、霊肉一如や霊体を根拠付ける「受肉のキリスト」へと収斂する一元的ビジョンである。もちろんこの身体性は唯物論的なものとは異なり、むしろ心身一如的なものとして人間の本质を形成し、パウロが復活後の身体として認めた「霊体」と同定される。

しかも逢坂はその成就について、物に限定されないが物でもある現実的根拠を主張する。生ける表徴、つまりたんなる記号をこえた秘義性を体现する、サクラメントとしての聖体である。ここでの聖体は「生きる霊」である霊体に向けて、キリストの「生かす霊」を与え増す存在である。また「聖体への触覚は至純の喜悦」であり、「十字架のキリストと接触していることをさとる」と最大限に評価されている。

こうした実体論的な発想にのっとり、逢坂はプロテスタントイズム全般に読み取れる主観主義をきびしく批判する。アウグスティヌスが客観の三一神によるサクラメントにおける聖礼典の実在としての実体変化をこそ重んじたのに対して、まずルターが内的感謝という良心主義を発動することによって主観へと逸脱し、キリスト自身よりも十字架の功績を重視する転倒に至ったと批判され、つづいてその内在主義をカルヴァンが強め、昇天した霊的存在としての霊在のみを重視し、聖体を記号へと貶めたと否定されるのである。

後期逢坂の神学思想は総じてカトリック的な性格が強いが、カトリックのローマ首位権、教皇無謬説、スコラ神学の機械的硬直性、外国人司教等を批判する逢坂は、「プロテスタントとカトリックの中間道」である「『カトリカ』すなわち公会」を求める。この公会は現世のただなかで、あらゆる世俗的な存在に対して批判的に向かいあう。

ここに当時の国家体制を支えた諸思想ことに京都学派の哲学との関連を問うことができる。当時の京都学派には三木清を通じてマルクス主義の影響が強く見られる。三木は通常の「存在としての歴史」から区別された「歴史を作る行為そのもの」としての「事実としての歴史」にはたらく「対象化不可能」な「事実としての主体」に注目するが、他方でヘーゲルに同意して実体を事実ならぬ存在に託するかたちで主体から弁別する。やがて京都学派の哲学は個から離れて、国家や民族といった、すべての母胎的起源にして媒介である特権的な「基体」へと回収されてしまう。

このような思想状況において逢坂は、西田を尊敬しつつも「やはりキリスト教に成りきれていず、教会というものが思想に加わっていません」と批判する。このいわば意図的誤読ともいえる発言の背景には、逢坂もまた主体への強い共感を抱いていた事情がある。逢坂は日本基督教団結成を批判するが、それは教派主義を密かに温存させた主観的妥協とサクラメントの軽視によって主体が忘却されていたからである。むしろ教会合同は「奥義」つまり「伝統」を核心としながら、「敬虔の体験」の「連鎖」から歴史的視圈を確保し、「創造者の太古から持て

る体」である「霊体」として聖体、つまり歴史を超越する「主の体」すなわち「主体」によらねばならない。この逢坂の思想には主体と実体との分裂がない。そこではいかなる基体も主体の前には比較以前の絶対的極小存在にすぎない。つまり、人間感情のあらゆる面に通じるがゆえに体制補完に利用されてしまう聖書への主観的反応よりも、サクラメントによる客体的聖体のほうが、国家を超越する根拠たりうるのである。

「感傷の共同体」主義に対する〈凍結の思想〉として逢坂の神学思想は、近代日本キリスト教思想研究において、プロテスタンティズムの受苦的疎外態を、さらには不在に等しかったカトリシズムの代行者を仮想し描写するために、有益な照合系だと思われる。

斎藤茂吉の病者への眼差し

小 泉 博 明

斎藤茂吉は精神病医である。ここでは、茂吉の精神病者に対する眼差しを茂吉の作品を通して考察するものである。歌人として斎藤茂吉の名を一躍高らしめた第一歌集『赤光』（大正二年、東雲堂書店初版）の中で、異彩を放つのが「狂人守」の連作である。精神病者や精神病医、さらには精神病院を題材とした歌が詠まれたのである。当時、茂吉は東京帝国大学医科大学を卒業し、恩師呉秀三が院長であった、東京府巢鴨病院の医員であった。

茂吉は精神病者の「狂人」に対し、精神病医である自らを「狂人守」という。また、精神病医を「感謝せられざる医者」という。「狂人守」とは、誰もが日常で使用する言葉ではない。この言葉には茂吉の精神病者への深く沈潜した思いがある。しかし、精神科医で精神科医療史を研究する岡田靖雄は、茂吉の歌には「狂人守」「狂人」「狂院」「瘋癲院」などという差別語があり、差別問題への意識が欠如していると皮相的に批判している。確かに、恩師呉秀三は病名から「狂」の字を取り除く事に腐心した。例えば躁鬱狂は躁鬱病となった。しかし、世間も同様に「狂」の字と訣別し、差別が解消されたのであろうか。呉秀三による理念は存在するが、現実には精神病者の中で、取り決められた病名の変更に過ぎなかったのが実態といえよう。よって、呉秀三の高邁な精神は、当時の社会では思うように浸透していかないのである。一九二四（大正一三）年一月一九日付の、養父紀一が院長であった青山脳病院焼失の新聞記事の見出しには「焼出された狂人」とあり、焼け跡に佇み茫然とする精神病者の姿が赤裸々に写真で掲載されている。この一例でもって、すべてを語っているのである。「狂」の字は日常の空間では、何ら抵抗なく語られていたのである。漸く戦後になり、一九七〇年代になると短歌にある「狂人」への批判が高まるようになったのである。大正デモクラシーの時代風潮にあっても、精神病者の人権の回復までの議論は及ばない。現代とは時代精神の隔絶した相違についての認識が極めて肝要なのである。

茂吉が「狂人守」の歌を詠んだ頃に、恩師呉秀三は東京帝国大学精神病学教室の教室員を一府一四県に派遣し、一九一〇